

コミュニケーション能力

そして/あるいは多元的現実

亘 明 志

コミュニケーション能力の理論は、広義には、いわば社会の「文法」を解明する理論であると規定することができただろう。わたしの論文は、主として、理論的問題を対象にしているが、必ずしも体系的な記述をねらったものではない。それは、一つには、わたしのとりあげた問題が実質的な定式化を可能にするほど十分には解明されていないということにもよるが、同時に規則体系が実際の社会過程にどのように回帰的に埋め込まれているかということにも関心があるという理由による。また、理論的志向の遠大さにもかかわらず、まわめて限定された範囲の問題しか扱っていないということも断わっておかねばなるまい。すなわち、「言語は実践的な意識、他の人間にとっても存在し、したがってまた私自身にとってもはじめて存在する現実的な意識である」(Marx, Engels, Die Deutsche Ideologie)と規定されるようなレヴェルを主要な対象にしている。

わたしはまず問題をコミュニケーション行為に限定した。このことは、必ずしも社会学における行為論の伝統に従っているわけではないけれども、一応「行為論的」アプローチをとっていることを意味する。さらにわたしは、言語構造とコミュニケーション行為との関連について議論を集中し、非言語的コミュニケーション(non-verbal communication)についてはとくにとりあげなかった。

'70年代にはいって、非言語的コミュニケーションの実証的研究は、とくに心理学的観点から着々と蓄積されつつあり、理論的な面でも、言語学および人類学を背景として Birdwhistell の 'kinesics' や Hall の 'proxemics' など整備されてきてはいるが、まだ充分なものとは言えない。非言語的コミュニケーションの研究者は、通常、マルチ・チャネル論の立場をとるか、コミュニケーションの多元的回路がどのような原理に従って構造化されているのかということはまだほとんど解明されていないし、文化的コードや認識論的地平をも射程に入れたアプローチは未開拓であると言ってよい。Cicourel の「認知社会学(cognitive sociology)」は、そうした理論的不備を補うものとして注目すべきものではあるけれども、理論的定式化からはなお遠い。こうした理論的状况において、非言語的コミュニケーションを前言語的レヴェルとしてあらかじめ措定してしまうことは、理論的曖昧さと混乱しかもたらさないだろう。

そこでまず、わたしは、統語論と意味論を基盤にして語用論的レヴェルに踏み込むことによって、言語を根源的な社会性という観点からとらえかえすことを課題にした。このことは、単に従来周辺的な地位しか与えられていなかった語用論もしくは言語使用の理論を問題化するというにとどまらず、経験的根拠にもとづいて一般言語理論との関連を考察し、それをコミュニケーション能力の理論として再構

成することを旨とするものであるということの意味する。

Habermasは、批判理論の基礎としてコミュニケーション能力の理論を提唱している。わたしは、変形生成文法の理論的前提とコミュニケーション能力という概念を想定する根拠とを検討してみることによって、彼の主張を明確なものにしようとした。Habermasの理論的前提には必ずしも妥当なものとは思えないものもあるけれども、わたしはアロレゴメナの域を越えて実質的議論が可能となるようなレベルにまで具体的に問題を掘り下げることによって、コミュニケーション能力の理論についての実質的な展望を得ようとした。さらに、生成文法の諸概念によってエスノメソドロジーを定式化しようとしている Cicourelの主張を比較検討してみた。エスノメソドロジーについては、学説史的もしくは思想潮流的観点からする議論や論評は様々あるが、そうした俯瞰的な位置づけは、現状ではかえって一面的の感を免れえない。それゆえ、わたしは、あくまで個別的な問題を議論するにとどめた。Cicourelの主張は、なお論争的な位置にあり、決定的なこととして述べることは少なく、今後の理論的および実証的研究の蓄積の上に解明されるべきことかろである。なお、体系的に歪められたコミュニケーションについては、本来、各論的テーマとして論じるべきところであるが、コミュニケーション能力の理論の位置づけに関して重要となってくる若干の問題を論じるにとどめた。

論文の構成は以下のようである。

第1章 コミュニケーション能力

- 第1節 変形生成文法の枠組と主張
- 第2節 ラング/パロールと能力/運用
- 第3節 言語習得と生得仮説
- 第4節 コミュニケーション能力の概念
- 第5節 指標的表現
 - 0. 序
 - 1. 発話の前提
 - 2. 遂行的発話
- 第6節 生成意味論とエスノメソドロジー

第2章 体系的に歪められたコミュニケーション

- 第1節 出来ごととしての言語行為
- 第2節 解釈学的理解について
- 第3節 言語分析としての精神分析
- 第4節 Labeling Theoryの批判的検討

第3章 多元的現実

- 第1節 多元的現実について
- 第2節 体系的に歪められたコミュニケーションと多元的現実

第3節 社会的知識と解釈手続き

第4節 回帰性

第5節 コミュニケーション能力と多元的現実

結語 解放論への道すじ

わたしは、コミュニケーション能力の理論の成立をただちに目指したわけでも、その全貌を示そうとしたわけでもない。すでに指摘したように、狭義のコミュニケーション行為に限ってみても、非言語的コミュニケーションを直接には扱わなかったし、またコミュニケーション能力との関連で重要な論点を提供すると思われる言語習得の問題にも簡単にしかふれなかった。にもかかわらず、まさに「一点突破の全面展開」という戦術をとることによって、つまりもっぱら言語を根源的な社会性という観点から掘りつづけ「野生の次元」に到達することをめざすことによって、社会学的諸問題の一面が開示されることになった。

1° コミュニケーション能力の理論について

「人間は一度も経験したことのない文を理解したり作り出したりすることができる」という「言語使用の創造的側面」についての Chömsky の言明は、次のような内容を含んでいるものと考えられる。

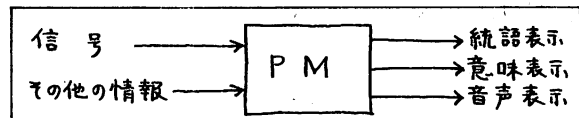
- ① 人間が用いることのできる文は無限である。当然のことながら、人間は無限の文のリストを記憶しているわけではない。それゆえ、有限の規則によって無限の文を生成することのできるような装置を人間は内蔵しているに違いない。このような装置は、回帰的機構つまり一つの文を別の文に埋め込むことのできるような規則を備えていなければならない。このような意味で、人間を、ことばを話すように作られたオートマトン(自動機械)になぞらえることができる。
- ② 人間の言語使用は刺激の統制を受けない。一定の刺激を受けたとき、もしくは一定の心的状態にあるとき、そしてそのような場合に限り、特定の文を発話するというのは、正常な言語使用ではない。この点で、人間の言語使用は、動物の反応やオウムのおしゃべりとは根本的に異なる。
- ③ 人間が正常に言語を使用する際には、状況に応じて適切な文を作り出している。このことは、たとえば上で例に出したオートマトンなどによってはまねることができない特性である(単に刺激の統制から自由であるというだけなら、オートマトンにランダム要素を含ませればよい)。従って、この点において、言語使用の創造的側面は単なる機械的説明の範囲をはるかに越えている。

さて、③の「状況への適切性」は、一見すると①、②の主張と対立しているようにみえる。にもかかわらず、これは、基本的な区別を反映しているものとみなすことができる。すなわち、「規則に支配された創造性」と「規則を変える創造性」との区別である。「規則を変える創造性」は「規則に支配された創造性」を前提にしているが、状況への適切性ということは、「規則に支配された創造性」と同時に、

その多様な可能性において、「規則を変える創造性」の契機をはらんでいるものとみななければならぬ。

言語を社会的機能から説明することは妥当ではないということを Chomsky は示している。言語はコミュニケーションにとって必ずしも「機能的」ではない。それは、言語のコミュニケーション的機能が多くの機能の中の一つだからというのではなく、そうした「機能的説明」を越えて、統語構造が自律性をもっているという理由による。そこで Chomsky は、言語の普遍的特性が、個別言語の習得を可能にするような能力として、人間に生得的にそなわっているとみなした。しかし、この生得性は、生理的発声器官の構造や神経細胞の組織などにすべて還元できるわけではない(還元できるとしたら、言語使用が刺激の統制から自由であることと矛盾する)。それゆえ、生得性の内容、さらには Chomsky が前提にしている諸概念を洗い直してみる必要がある。

Chomsky は、「話者・聴者が持っている自分の言語についての知識」を言語能力 (linguistic competence)、「具体的場面において言語を実際に使用すること」を言語運用 (linguistic performance) と呼び、両者を根本的に区別した。しかし、Hymes によれば、この区別は、一応、妥当であるとはいえ、曖昧さがあるという。言語運用は、第一に、根底にある規則の体系に対して観察可能な行動を意味する。ところが、言語運用それ自体にも規則性があるわけで、そのことは、言語的データを説明するための言語運用モデル(たとえば知覚モデル)にみられる。知覚モデルは、文法と同じように、音と意味とを特定の仕方に関係づけるものであるが、「入力」として信号を他の多くのものといっしょに受容し、様々な文法表示を「出力」として付与する仕組みをもっている。すなわち、知覚モデル PM は、能力モデル G を組み入れているが、G によって決定される音-意味の連合を越えて、多くの情報を使用し、知覚戦略の組織の制約のもとに作動する。この意味での言語運用は、したがって、入力としての言語的データに対して、規則性をもった根底的なものと考えられている。たとえば、「文体上の語順変更は文法規則であるよりは、言語運用の規則である」(Chomsky, 1965, p127) という場合の「運用」の概念は、この意味で用いられている。



以上のことから、能力/運用の区別には、次の二つの対立があることがわかる。

- (i) (根底にある)能力 / (実際の)運用
- (ii) (根底にある)文法的な能力 / (根底にある)モデルとしての運用規則

Chomsky においては運用規則は、心理的メカニズムとして示唆されているだけであり、なお曖昧なままに残されている。Hymes は 幼児の言語習得についての研究に基づき、これを文を使用する際の適切性についての判断と考えるべきだとする。すなわち、幼児は、発話行為のレパトリ-を遂行し、発話に参加し、他者による発話行為の遂行を評価できるような能力を習得するのであり、このような能力は、心理的メカニズムには還元できない。それゆえ、Hymes は、言語使用についての根底にある能力をコミュニケーション能力としてとらえることを提唱する。(Hymes の

コミュニケーション能力の理論の具体的内容については省略する。）

Hymesのコミュニケーション能力の概念は、「能力」概念を二次的コードも含む形で拡張したものであるが、Habermasによれば、これは社会言語学的に限定された用法であって、Chomskyの言語理論がもっている可能性を十分に発掘しうるものではないという。そこでHabermasは、言語的普遍性(linguistic universals)について検討することから始める。普遍意味論が独白主義、ア・ポリオリズム、要素主義には還元できないということに基づき、Habermasは意味論的普遍性を分類する。すなわち、第一に、経験を変化させるような意味論的普遍性と、このような変化を可能にするような意味論的普遍性とを区別する(ア・ポステリオリ/ア・ポリオリ)。次に、すべての社会化に先行するような意味論的普遍性と、可能な社会化の条件と結ばれた意味論的普遍性とを区別する(独白的/間主観的)。それゆえ、意味論的普遍性は次のように分類される。

	ア・ポリオリ	ア・ポステリオリ
間主観的	対話・構成的普遍性	文化的普遍性
独白的	解釈の普遍的認識図式	知覚的・動機的構成の普遍性

Chomskyは、言語的普遍性を(独白的かつア・ポリオリな)生得性に帰しているが、Habermasは、それだけではないということを主張している。それゆえ、言語コミュニケーションを、言語能力の適用として理解するだけでは不十分だということになる。すなわち、可能な通常の言語コミュニケーションの状況を作り出すことは、そのまま理想的な話し手の一般的能力に属している。そこでHabermasは、コミュニケーション能力を「理想的な発話状況のマスター」と定義する。コミュニケーション能力は、理想的な発話状況における可能な相互主観性の構造の条件を指定するものである。

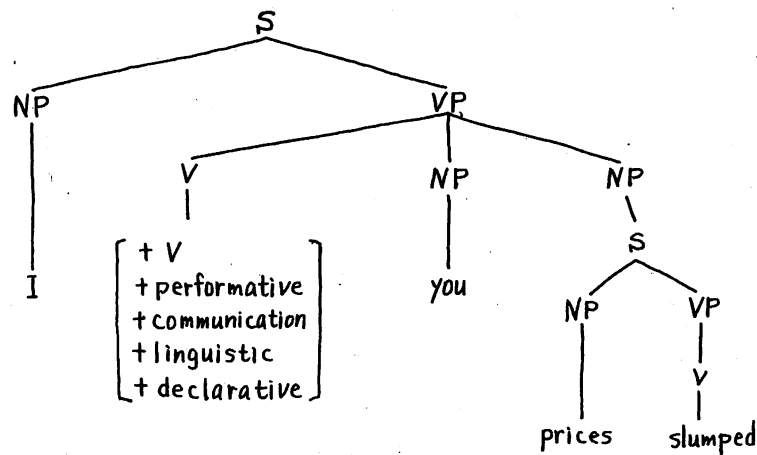
以上のように、Habermasは、発話の普遍的レヴェルを問題にする。それは、一見すると、一般的に妥当な議論のように思えるが、分類的アプローチにとどまっておらず、経験的裏づけと方法論とを欠いているために、有意味な構造的一般化を見失っている。たとえば、Habermasは、遂行文(performative sentence)を動詞のカテゴリ-の問題ととらえ、その分類基準を提案しているが、これは統語論と語用論の境界領域に属する現象であり、発話における行為の問題として定式化することによって、Habermasの分類基準がその中に位置づけられるような有意味な構造的一般化が可能になる。

Rossは、生成文法の枠組に従って、表層構造に遂行動詞をもついわゆる「遂行文」だけでなく、すべての文が深層構造において、一つの遂行動詞をもつということを示そうとした。たとえば、Rossは、

(1) Prices slumped.

という平叙文の深層構造を

(2)



と分析する。Rossは、このような分析を遂行的分析 (performative analysis) と呼び、英語について遂行的分析を支持するような証拠をあげ、これが言語的普遍性を示しているものとみなした。こうした言語的事実は、日本語にも見出しうる。たとえば、

- (3) a. アキオ_iは学校には来ていないだろう。彼_iは病気だから。
 b. アキオ_iは学校には来ていないだろう。彼_iを見かけないから。

という二つの発話において、(3-a)の後半は、「アキオが学校に来ていない」理由を述べているのに対し、(3-b)の後半は、前半の発話を行った理由を述べているものと解釈できる。両者の違いは、次のように言い換えてみれば、明らかになるだろう。

- (4) a. アキオ_iが学校に来ていないのは、彼_iが病気だからだ。
 b. *アキオ_iが学校に来ていないのは、彼_iを見かけないからだ。

ところが、(3-b)を次のように言い換えてみると成り立つ。

- (5) アキオ_iが学校に来ていないと私が言っているのは、彼_iを見かけないからだ。

そうすると、(3-b)の前半は、深層構造においては、「私が[……]と言っている」というような母型文に埋め込まれているのではないかと考えられる。こうした現象を、生成文法の枠組に基づき一般的に考察することによって、すべての文の深層構造が(2)のように分析できるというのが、Rossの遂行的分析についての主張である。

Rossの主張については、なおいくつかの問題が残っている。たとえば、Rossは遂行的分析を統語論の問題とみなしているが、語用論の問題としてコミュニケーション能力の理論からアプローチすることも可能である。確かに遂行的分析を支持する証拠の中には統語論的根拠をもつと思われるものもあるが、これを統語論を拡張する方向で定式化しようとする、特殊な変形を仮定しなければならぬことなど問題が多いのである。

さて、Habermasは、Chomskyの言語理論が独白的かつア・プリオリな生得性を基

盤にしているのみならず、言語能力の理論を補完するものとしてコミュニケーション能力の理論を設定しようとしている。わたしは、コミュニケーション能力の位置づけについて、語用論と統語論の境界領域および意味論的基盤などを問題にすることによって具体的に検討してみたが、なお明確には主張できない部分が多いとはいえず、一般的な認知的基体として言語能力を基礎づけるものであると仮定するのが妥当なように思われる。実際のところ、Habermasの前提は、生成文法それ自体が独白的かつア・プリアリな領域の理論であるとしてそこに閉じ込め、コミュニケーション能力の理論を別の領域に設定することになるのであるが、生成文法の手続きを検討してみればそれがそうした領域に閉じ込められるべきものではないということはApelが主張している通りであるし、また生成文法とChomskyが主張していることとを同一視することもできないのである（事実、変形生成文法理論の立場に立っていても、Chomskyの主張に同調しない人は多い）。

Chomskyは、生成文法を「明示的に定式化された生成過程の規則体系」という意味と「native speakerの暗黙の言語的知識」という意味との両様に用い、それを言語能力の理論ととらえることによって、論理知と事実知を統合するような認識論的地平を切りひろこうとしたが、なお未解決の問題や曖昧な部分も多い。しかし、だからといって、性急な苛立ちを示すことは、批判的なものも生み出さなければならず、早漏の傾向に拍車をかけるだけであろう。わたしは、言語コミュニケーションの具体的一側面を掘り下げることによって、生成文法を内蔵すると同時にそれを基礎づけるようなコミュニケーション能力の理論の可能性を探ってみたわけである。

2. 生成意味論とエスノソドロジー

生成意味論は、Chomskyによって確立された標準理論の根本的修正を要請するものとして、G. Lakoff, McCawley, Ross, Postal, Perlmutter, R. Lakoffなどによって提唱されたものであるが、ここでそれについて論じるわけにはいかない。深層構造のみが意味解釈に関与し、したがって変形は意味を変えないとする標準理論の仮説は、その後の研究によって、制約が強すぎることを示された。そこで、「文の意味」は統語構造の解釈であるという仮説を保持しつつ表層構造も意味解釈に関与するという修正の方向が、拡大標準理論である。これに対して、「文の意味」は解釈されるものではなく、もっとも深い構造がそのまま意味表示であるとみなし、それゆえ「意味解釈部門」を別にもうけることをやめ、同時に統語構造の自律性を否定し、統語構造は意味構造から派生するものであるとするのが、生成意味論の主張である。実はこれは、標準理論における統語的な深層構造ではきわめて限定された範囲の言語的普遍性しか解明できないということから、Chomskyのモデルをこえてさらに深い構造を定式化しようとする中で提案された構想であった。しかし、Chomskyは、生成意味論を支持するような決定的な経験的根拠が乏しいこと、生成意味論に独自の主張とみえるものも適切に定式化しなれば拡大標準理論と実質的な違いがなくなると思われるものが多いこと、さらに生成意味論では変形の制約について問題が

残っていることなどを指摘している。

さて、Garfinkelによれば、陪審員についての研究がエスノメソロジーの出発点であったという。彼は、陪審員たちが、陪審員の作業を行うことにおいて、何をしているのかということをもどのようにして知るのか、という問題に直面した。陪審員たちは、社会の組織された事象がスムーズに進行する仕方についてのある種の知識を使用する。彼らは、常識的な考えを用いるとき、常識的であろうとしているのではなく、合法的かつ公平であろうとしている。しかし、彼らが合法的であると理解しているものが何であるかを示すことはできない。ただ、彼らは、「事実」や「想像」、「意見」あるいは「私の意見」や「あなたの意見」また「われわれが言う権利を与えられていること」や「証拠が示していること」、「証明できること」、「彼が実際に言ったこと」などを并列する独自の方法をもっているのである。

こうしたことを解明するためには、社会的事象を研究者にとっての観察可能なレベルに還元するのでは不十分である。むしろ、メンバーが共有している知識は、メンバー相互の間で報告可能な形で示され、同時に観察可能なものになるとみなす必要がある。そこで、「観察可能-報告可能(observable-reportable)」ということも、一語で「説明可能(accountable)」と呼ぶ。つまり、「説明可能」ということは、メンバーがある状況において実践的行為を行う場合に、通常、どのような組織化された方法を「利用可能(available)」なものとして用いているか、ということの意味している。

Cicourelは、生成文法とりわけ生成意味論の主張をとり入れることによって、エスノメソロジーをエラホレイトしようとしている。そこで、生成文法と対照させて、エスノメソロジーの問題意識がどのようなものであるかを特徴づけてみよう。すでに指摘したように、生成文法は「明示的に定式化された規則の体系」と「native speaker がもっている暗黙の言語的知識」という二つの意味で用いられる。そうすると、言語学者が仮設する規則は、話し手-聞き手が言語コミュニケーションにおいて実際にそして暗黙のうちに使用しているものであるのかということが問題になってくる。生成文法は言語能力をもっている話し手-聞き手の言語直観を解明する理論であるとChomskyが言っている以上、なおさらこのことが問題になるだろう。もちろん、言語学にとっては、こうしたことは手続き上の問題に関わるだけで、主要な問題ではないが、エスノメソロジーは、規則の体系だけでなく、それがどのように存立しているのか、あるいはそれが実際の行為過程にどのように埋め込まれているのかということも問題にするのである。そこで次に、生成文法の研究手続きを検討してみよう。まず言語能力をもった話し手-聞き手の直観にもとづいて、規則仮説が構成される。もしそこが導かれる結果が直観と異なっていれば、仮設された規則が間違っていたとみなされて破棄されるか、他の規則を付け加えたり部分的に条件を変えたりして修正される。ここまでは、経験科学の方法と同じである。しかし、このような処置が行われるのは、言語学者が言語能力のある話し手-聞き手とのコミュニケーションにもとづき、自分の規則仮説から導かれる結果が話し手-聞き手の直観と一致していないと信ずべき根拠がある場合に限る。また、他の場

合には、このような処置をとるかわりに、言語学者は、またはや言語能力のある話し手-聞き手とのコミュニケーションにもとづいて、何らかの言語外の要因の介入があったという結論に到達するだろう。このように、生成文法の研究手続きには、本質的に了解的方法が介在している。

では、こうした「了解」の手続きはどのようなものなのか？ Chomsky は「等質的な言語社会における理想的な話し手-聞き手」を前提にしているか、もし統計的な可能性に依拠するならば、こうした前提は容易に否定される。実際、統計的データによって、生成文法の検証手続きを批判する人もいる。しかし、Chomsky も指摘しているように、統計的な可能性は生成文法にとって本質的な問題ではない。そうすると、こうした前提を維持するためには、言語規範がどのようにして存立しているのかということが問題になってくる。言語規範は、客観的な実在体であるか、同時に言語共同体のメンバーの「暗黙の言語的知識」、つまり各メンバーが共通して知っていることとみなされることでもある。そこで、「みんなが知っていること (what everyone knows)」とは何かと発問することかできる。つまり、言語規範を析出す前提として、「各メンバーが共通して知っているということ」それ自体を問題にするわけである。規範の存立を可能にするようなこうした普遍的な原理も、Cicourel は「解釈手続き (interpretive procedure)」と呼んでいる。

具体的な例をあげてみよう。生成文法では、「文」を対象にし、その文法性についての直観をもとにして理論を構成する。それゆえ、何か「文」であるかを決定する「文境界 (sentence boundary)」が前提になっている。もちろん、「文境界」は言語学者が恣意的に決めるものではなくて、規範として通用しているものである。では、こうした規範は、どのような手続きのもとに成立しているのか？

たとえば、次のような発話資料の分析手続きを検討してみよう。

(6) the baby cried the mommy picked it up

これは、社会的指標を欠落させた発話資料であり、「文境界」についての情報もない。これには、少なくとも四通りの分析、したがって四通りの「読み」が可能である。

- (7) (i) The baby cried. The mommy picked it up.
(ii) "The baby," cried the mommy, "picked it up."
(iii) The baby cried, "The mommy picked it up."
(iv) The baby cried? The mommy picked it up!

これらの四通りの読みの意味は著しく異なっている。そこで次に、「読み」と、それが妥当するような「意味世界」との関係を考えてみよう。(6)の資料の分析は、その「読み」が指示する「意味世界」と対応しているが、分析の相違が意味の相違を生み出すのではない。むしろ、意味の方が分析の相違を生み出すものと考えられる。つまり、分析者は、一つの「意味世界」に基づいて分析する。たとえば、分析者は、最初から(6)の資料に四通りの分析が可能であることを見透した上で、一つ

の分析を選択するのではなく、一つの「意味世界」に基づく一つの分析を行ったのち、一定の反省作用を経て、他の分析も可能であることを知るのである。さらに重要なことは、前提となっている「意味世界」が「読み」を方向づけているということである。たとえば、(7-i)の発話が一定の状況に埋め込まれている場合に、通常、'the mommy'は'the mommy of the baby'と解釈されるであろう。そして、このような解釈の仕方は、一定の普遍性をもっていると考えられる。こうしたことは、もちろん、厳密に言えば、'sentence'のレベルを越えた'discourse'のレベルの問題であるが、「文境界」の内部の「読み」が状況に埋め込まれた場合に、その方向づけに関与し、一般的には「文境界」という暗黙の規範を成立させているのである。

Cicourelは、生成意味論派のLakoffの議論に基づいて、統語論上の区別では、「読み」の基盤になっている「意味世界」の相違を扱うことができないということも指摘している。そこで問題になってくるのは、異なってはいるが同時に可能でもある「意味世界」を表象しうるような論理を解明することである。このような論理とは、たとえば、ある世界における単一の実在か、別の世界では二つの異なる実在として表象されるような論理である。

このような論理は、「解釈手続き」の問題として、さらに厳密に論じることができ、が、問題は要するに、どのようにして表層的規範が各メンバーに共有されており、そのようなものとして、つまり規範として存立しているのかということである。規範は、社会的相互行為を前提にしているか、客観的実在体とみなしうるものであり、相互行為には還元できない。しかし、規範が各メンバーに共有される仕方についての原理は、規範の存立機制に一定の制約を課している。それゆえ、「解釈手続き」は、表層的規範が規範として存立しうる条件を指定するものであるということができる。Chomskyは、個別的な言語規範がその表層的な相違にもかかわらず一定の制約のもとに成立していることを示した。そして、このような普遍的な制約は、「規則に支配された創造性」を可能にしているものであり、刺激-反応の制御をはるかに越えているという意味で、生得性に帰せられるべきものと考たわけである。しかし、この生得性は、複雑な内容をもってあり、まわめてニュアンスに富んだもので、均質な生得性に還元できるとは思えない。「解釈手続き」とは、Chomskyが生得性に帰したものの多様なニュアンスを腑分けするための概念でもある。すなわちそれは、経験の制御を越えているか、経験との相互作用を前提にして経験を方向づけるような原理である。それゆえ、「解釈手続き」とは、根源的な社会性、根源的な歴史性の契機とみなしうる。

3° 体系的に歪められたコミュニケーションと多元的現実

Habermasは、体系的に歪められたコミュニケーションを論ずるにあたって、通常の発話に対する普通の解釈と、発話に対する特殊な解釈、それは特に不可解であったり誤解を生んだりするような解釈であるが、このふたつを区別する。このことは、コミュニケーションの指示内容ではなく、「合意の構造」に注目することを意味す

る。それゆえ、「合意の構造」に関して、「真の合意」と「ニセの合意」とのア・
プリオリな区別が前提にされる。そして、「理想的な発話状況についての知識」つ
まりコミュニケーション能力は、体系的に歪められたコミュニケーションに対する
批判の基準とみなされる。Chomskyにおいては、「理想的」ということは言語外の
要因から独立した統語的自律性を示すものであったが、Habermasにあっては、そこ
に一定の「価値基準」が付与されている。わたしは、「合意の構造」を問題にする
ことには賛成だが、Habermasの前提は妥当なものとは言いかたいと考えている。と
いうのは、確かにこのような前提は、実践上の問題とも関連して、理論的有効性を
もつようにみえるが、そのためにかえって、曖昧さや論理的逆説を生み、それが理
論的弱点ともなっているからである。わたしは、論文では、若干の理論的問題点を
指摘したにすぎず、多くは今後の課題として残されている。ここでは、Schutzの「
多元的現実論」と対照させつつ、主要な論点の一つを素描するにとどめる。

Schutzは、特定の認知様式(cognitive style)によって特徴づけられる一連の経験
領域を、「限定された意味領域(finite provinces of meaning)」と呼ぶ。Schutzが現
実の多次元性を問題にするにあたっての理論的前提は次の二点に要約できるように
思われる。

第一点は、どのような意味領域にある場合でも、作業行為(working)を通して外
界と関わっているという前提である。どの意味領域にいるかということは、主体の
関心の向け方、アクセントの置き方の違いによる。それゆえ、あらゆる行為の中で、
作業行為は第一に重要なものであり、特異な構造をもっている。すなわち、「行為
の意味」は「完了形」において問われるが、「完了形」においては、主体はつねに
断片でしかない。展開過程の作業行為においてのみ、自己は全体的な自己を経験し
ているのである。

第二点は、第一点から導かれる帰結でもあるが、多くの現実の中で、日常生活世
界が「至高の現実(paramount reality)」の位置を占めているという前提である。
その理由は、日常生活世界が身体的活動を通してコミュニケーションを可能にする
ような相互主観的な基盤を形成しているということである。

Schutzは、単独の主体および対面的関係を基準にして社会的世界の構成を考察し
ているが、その根拠は、このような前提にあるものと考えられる。ところで、相互
主観的な場を形成している基盤が日常生活世界であるということと、日常生活世界
から他の意味領域が派生するということとは同一のことではない。つまり、身体的
活動を伴う作業行為がつねに前提になっていることと、別の意味領域における経験
を作業行為に還元するということは別のことである。Schutzは、「日常生活世
界」のほかに「生活世界」という言葉も用いている。が、しかし、「還元の最も
偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということである」というMerleau-Pontyの
言葉を想起すまでもなく、Schutzにおいては、あらかじめ「還元」を予想して
理論が構成されているために、かえって曖昧さを生じさせているのである。このよ
うな理論的弱点は、Schutzのシンボル論にもっともよく示されているように思われ
る。Schutzは、超越的经验を可能にするものとしてシンボルを定義した。この定義

は、Schutzの理論的前提からして当然の帰結であるが、ではいかにして超越的経験が可能であるかという点、その基盤は、日常生活世界に還元されるほかはない。それゆえ、日常生活世界の意味領域にあって、それを超越するような経験がなぜ可能であり、どのような基盤の上に成立しているのかと問うことは、Schutzにあっては同義反復にしかならないのである。

Schutzは、「飛躍(leap)」「衝撃(shock)」という日常生活世界を超越する経験を感動的に記述しえたけれども、経験それ自体の体系的な基盤を把握することができなかった。これに対して、Habermasは、体系的基盤の上に理論を構築しようとしたけれども、「理想的な発話状況」を昇天させてしまって、「真の合意」と「ニセの合意」とのア・プリオリな区別に「批判」の根拠を求めるため、経験それ自体がはらむ動的契機をとり逃がし、「批判」が宙に浮いてしまうのである。精神分析位置づけについてのHabermasの議論は、このような欠陥をもっともよく示しているように思われる。わたしは、コミュニケーション能力の理論を、経験それ自体を組織している体系的な基盤を解明するものとみなし、それを基礎にして「体系的に至められたコミュニケーション」を解明することによって、両者の弱点を乗り越えるような方向を探ってみた。

4° 理論的展望

コミュニケーション能力の理論は、Habermasによれば、社会学において、現在、支配的な「役割理論」の根本的な修正に至るものであるという。Cicourelもエス/ノソドロジエの立場から同様の主張を展開している。しかし、こうした理論形成の新しい方向に踏み出すことは、最初の何歩かでさえ、たいへんな労力を要するものであるということを知らねばならなかった。わたしの論文は、ただ小さな一石を投じたにすぎない。にもかかわらず、構想としては「役割理論」のみならずさらに大きな展望をもつことが許されるであろう。

Chomskyは、言語のレベルにおける人間の創造性が、まったく無制限、無方向なものではなく、厳しい普遍的制約をもっているということを明らかにしている。この普遍的制約は、人間の創造性・自由を方向づけているものであるが、同時にそれを基礎づけ、確実な基盤を提供し、人間性を特徴づけているものである。それゆえ、普遍的制約は、人間の創造性に対立するのではなく、創造性を可能にするものである。それは、自由と対立する規範的なのではなく、規範と自由の相方を基礎づけている。人間の自由は、厳しい普遍的制約をもっているからこそ、無限の可能性に向かって開かれているのであり、規範もまた、一定の制約をもっているからこそ、人間の社会に特有な秩序を形成しているのである。

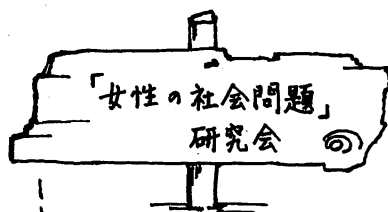
Durkheimは、社会現象を心理的要因や経済的要因に還元できないこと、社会現象は社会的要因によってしか説明できないことを強調し、集合表象の外在性、拘束性を主張した。そして、彼は、社会現象の究極的要因として社会的基体を考え、それに基づいて社会的分業を説明しようとした。しかし、彼が社会的基体として想定しているものは、社会の量と密度、たとえば人口の多寡・密度、その都市・農村にお

ける分布様式などであった。確かに、それは社会現象を根底において規定している外在的拘束的な要因を説明するか、社会現象に内在的な拘束性を説明するものではない。すなわち、Durkheimの社会形態学では、人間の社会が動物の社会と区別される根底的な要因を説明することはできない。言語は、人間社会を動物社会から區別するものではあるけれども、それは、単に人間社会に付加された一つの特性のひとつのものではなく、人間の社会を根底的なレヴェルで体系的に組織しているものである。

社会制度は、様々な類型がありうるけれども、まったく無制限なものではなく、それが人間社会である限りでの普遍的な制約があるに違いない。すなわち、社会の根底を支配している論理に従って、可能な社会制度は、一定の制約をもっているものと考えられる。広義のコミュニケーション能力の理論は、そのような社会の根底を支配している論理を解明するものとみなすことができよう。そして、どのような社会制度が歴史において事実実現されてきたか、それが経済的・文化的発展の特定の瞬間において与えられた可能性に関連して、どのようにして発生したかを問うことになる。その上でさらに、人間が到達した諸社会体系の系列は長大なものか短いものか、それはどのような活動余地と可能性とをもつのかと問うことが可能になるだろう。

こうして、コミュニケーション能力の理論は、言語の本質をふまえた上で、はるかに遠く社会の本質へと向かうことになる。そしておそらく、社会体系の理論の範型を実在体としての言語の存立機制に求める「言語派社会学」のプログラムは、コミュニケーション能力の理論を媒介にすることによってはじめてその展望が開けてくるに違いない。

(わたり あけし)



女性が「女性」という属性のゆえに社会状況のなかでぶつからざるをえないさまざまな問題群を、女性論としてではなく、社会学として、すなわち社会構造の問題として理論的に把握しよう、という問題意識で集まった研究会です。既存の社会科学の方法の徹底的な応用をめざすと同時に、その単純な適用では女性の社会問題を解明しえないことをかんがみ、既存の社会科学の方法論自体の再検討をもめざすものです。このような意味からすると、メンバーが、女性の社会問題をメインテーマとせず、むしろそれぞれ別のメインテーマを持ち、別の角度から理論化努力をしていくことに、かえって新味が出る可能性があるのではないかと思っています。

関心をお持ちの方(男女を問わず)の積極的参加を、期待します。

(世話人 船橋恵子)